

「さすがについていけないと思う作品も最近は多くなってきまし
たね」(東京・西神田のナチュラルローソン西神田三丁目店で)



立ち読み

コンビニは公共メディア

背負ったザックを無造作に床に置
き、コンビニの書棚に並ぶマンガ雑
誌を取り上げる。それは女学で講義
を終えての帰り道、日替りに繰り返
している習慣だ。少年誌や青年誌な
どにはほとんど目を通す。「マンガ
を読んで育った世代だから、40歳過
ぎてほとんど毎日コンビニで立ち読
みする人間は少ないでしょうね」

社会倫理学者という肩書からはイ
メージしにくい。経済学から現代
思想、サブカルチャーまで論じる風
鋭の論客である。かつて宮崎駿の風
の谷のナシカ」の思想的意味を著
作で論じたように、マンガも現代社
会を論じるための重要なフィールド
のひとつ。立ち読みは表層上の必要
に迫られて、という
側面もある。だが、
この空間、時間がし
つくりだるのはなぜ
かといえ、それが
「出合」の場所に
なっているからで
は、と思。

近頃の、一般の書
店はビール包装を
かける(な)マン
ガの立ち読み防止には相当腐心して
いる。本が傷んだり、立ち読みだけ
で済ませる客がいる。こじ薬を煮
す気持ちもわかる。「でも外側を見
るだけでは中身は判断できませんよ
ね。別に高邁な理想があってコン
ビが立ち読みを容認しているとは
思わない。しかし、結果としてこの
場所は人々がそれまで知らなかった
作品と出合える「開かれた場所」に
なっている。「新古書店なんかこそ
うだけれど、立ち読みできる店自体が
「メディア」になっていくんです」

「公共性」といったものはずつ
と関心があつた。利書を興にする様
々な人間同士がひしめきあつて生き

私のいる風景

watashi no iru fuukai

ている現代。ポストモダンの時代ゆ
え、何が「当てる前」なのかとい
ても容易に人の合意が得られない
時代である。その都合が互いに
折り合せて生きていくためには、う
すればいいのか。こんな問題意識か
ら、大学院ではマルクス経済学を学
んだ。しかしマルクス経済学の唱える
「正しさ」には次第に疑問が湧く。
やがて現実の経済を理解するがた
マルクス経済学は無力であり、市場
の役割を重視する新古典派経済学
の理論のほうがはるかに有効だと考
へる。

資本主義には左派が言う「例外」
や「不平等」の問題が確かにある
けれど、それは結局のところ市場の中
で解決していくはずか
ない。「経済学」
という教養」や「マル
クスの使いみち」共
著」でこのような議
論を展開したのも、
近年注目を集めてい
る「市場主義」をあ
ぐる議論について
「みんなが共通了解
できる基礎」を作り
たかったからだ。

そんな思いは、立ち読みを偏愛す
る気持ちとどこかつながっている。
よな気がする。「そういえば、幼
稚園児のころから立ち読みが好きで
したものだから、親が警察に通報
して大騒ぎになったことありまし
たね。どうやらお金入りだ。」

話を聞いたのは東京・神田の古書
店街の近く。「じゃあこれから僕
は立ち読みに……」取材が終わ
るべく、ちょっと弾丸よう足取り
でその背中を雑踏に消えていった。

文・時田英之
写真・田中成浩

いなば・しんいちろう 1963
年東京都生まれ。明治学院大教
授。著書に『リベラリズムの存
在証明』『『資本』論』『モダ
ンのクールダウン』など。

稲葉 振一郎 さん 社会倫理学者